
空に馳せる想い【長期休載中】

膳条 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に馳せる想い【長期休載中】

【Nコード】

N9312B

【作者名】

臙条 司

【あらすじ】

天城空は、とある理由から旅をしていた。勝手気ままな、一人旅。その旅の途中、偶然立ち寄ったとある町で、空は少女と出会う。それは偶然が紡ぎだす、恋の物語。その始まりだった。【長期休載中です。再開の目処もたっておりませんが、完結させずに削除するつもりはありませんので、再開の折は宜しくお願い致します。このページを開いて下さり、真にありがとうございました】

このお話を読む前に（補足説明）

蒼香「はい皆様、こんにちば。本作品『空に馳せる想い』のメインヒロイン、風原^{かざはら}蒼香^{あか}でつすー！」

空「一応、主人公の天城^{あまぎ}空^{そら}だ」

蒼香「さてさて、早速ですが“目次ページ”を見ていただけましたか？ 『なんだこりゃ？』って思った方もいるんじゃないかなーと思います」

空「確かに。“第 幕Aパート”とか、よくわからん目次だよな」

蒼香「本作品は少し特殊な形式を取らせていただいているので、その結果としてこういう目次になってしまった、というわけなんだなあ」

空「いいから、まわりくどいのはやめにして、サクッと説明してくれ」

蒼香「はい。本作品では、ADVゲームよろしく、お話の中で選択肢が現れることがあります。読者の皆様が『読みたいなー』と思っただけの方の選択肢を選んで、矢印で指示されたお話に進んでください」

空「ああ、それがAパートとかBパートとかいうやつか」

蒼香「そうでつす。基本的には一本道で、バッドエンドもないはずなので、気楽に読み進めていってください」

空「なんだか昔流行った“ゲームブック”みたいだな…… バッド
エンドがないのは作者の力量の問題か」

蒼香「『みたい』というか、発想はそのまんま…… あ、ちなみに
分岐が少ないのも作者のせい」

空「色々考え込んでた挙句、このザマか」

蒼香「そうそう、選択肢によってはヒロインが変わるとか、なんか
そんなことも考えてるらしいヨ」

空「色んなことを一度にできるほど器用じゃないくせに、無理をす
る……」

蒼香「なお、連載中は“最近投稿されたもの”を一番下に置いてお
きますが、次に新しく投稿した際に、見やすいように”目次の並び
替え”を行いますので、お話をすっ飛ばしたりしないように、ご注
意をお願いします」

空「お手数をお掛けしますが、何卒、宜しくお願い致します」

蒼香「それでは、本編をどうぞ……!」

プロローグ（前書き）

あらずじ通り、恋愛モノです。

携帯読者様向けに、一話あたりをできるだけ短く綴っていこうと思っと思っています。

“鍵作品”に大いに影響を受けているので、よく似た場面も多々あると思いますが、どうか暖かい目で見守ってやって下さい。

それでは、『空に馳せる思い』、はじまります。

プロローグ

空。

この言葉から、何を想像できるだろうか？

暖かい空気？ 柔らかな雲？ 心地良い風？ 澄んだ、蒼……？
いや、一面しか持ち得ない物は、この世には存在しない。そう、
いかなるものであるうとも、一つではないのだ。

俺はぼんやりと町を歩きながら、くわえた煙草に火を点けた。

時は夕方。刻限は五時になるくらいだろうか。

秋の夕暮れというのは、何とはなしに陰鬱いんうつな気分になるものだが、
今日はいつにもまして鬱陶うつとうしく感じる。

早くも西に傾いた夕日は輝きを真紅に変え、その光を受けて、人も家も、何もかもが血の色に染まっていた。口先五センチほどのところにある、煙草の火でさえも淡く見える。

ふうっと、溜め息のように吐き出した白いはずの煙が、やはり血に変わって空へと昇っていく。

俺はやはり、それをぼんやりと目で追って、空を仰いだ。

そこにあつたのは、“赤”い空。

そして、その”赤”の中にあつてなお、”蒼”を見せる服を着た女の子が徐々に大きくなっていく姿。

ん？ 女の子？ 何で女の子が空から……って、うわあああ！！

……今思えば、よくもまあ二人とも無事だったもんだと思うよ。
なにせ、彼女はマンションの四階から飛び降りて、俺はそれを受け止める形になったのだから。

これが俺、天城あまぎ 空と、空になることを望む”自殺志願者”の女

の子、
風原かざはら
蒼香あかの出会いだった。

ブログ（後書き）

いかがでしたでしょうか……って、まだ序盤もいいところなので、何とも言えませんよね。ごめんなさい。

更新は不定期になってしまっていると思いますが、もし宜しければ今後ともお付き合い下さい。

よろしく願いいたします。

第一幕（前書き）

第一幕

！！

擬音ではとても表せないような大きな音。

強いて言うなら、夜空に上がる花火の音に似ている。

ただ違うのは、ひゅー、という音が頭上から“近づいて”きて、どん、という音が体中を駆け巡る感じだ。

そして、花火ならばやや遅れてやってくる空気の波を何倍にも増幅したようなものすごい衝撃が、音と同時に全身を揺さぶる。

「痛たたたた……」

どというわけかはわからないが、上から降ってきたのは大きな“尻”。

それと地面との間で、夢の世界に旅立ってしまいそうな意識を、首を振って無理矢理に現実に取り戻す。

「あゝ、生きてる……俺、生きてる……」

「あれ、生きてる？ わたし生きてる……？」

俺が生命の素晴らしさに触れていると、それを侮辱するような“何気ない”声が背中から聞こえてきた。

ちなみに、これは比喩的な表現ではない。体が触れ合っているためか、本当に体中に響いてくるように聞こえたのだ。

“上”の奴もどうやら生きている事を実感しているらしい。そこに籠めらた感情が“喜”なのか“哀”なのかは知らんが、とりあえず一つ、言えることがあった。

重い！

「おい、感想は後にして、動けるんならどいてくれないか？」

できるだけ不機嫌さを声にしないよう、訴える。

「あ……ごめんなさい」

その時になって、少女は俺が下にいることに気付いたかのように、

そそくさと尻をどかした。

俺はようやく自由になった身体を起き上がらせると、さっと自分の全身を見渡す。

かすり傷はいくつかあるが、大した事はなさそうだ。腕も動くし足も動く。バイオリンも無事。代わりにといつては何だが、“ズボン君”が重症だ。

いい奴だったんだけどな……

少女の方も大した怪我はないようだった。俯^{うつむ}きがちに「また失敗しちゃった」などと、何か呟^{つぶや}いている。

「で、キミはどこから来たんだ？ お空にお城があつて、そこから逃げてきた、とか？」

とりあえず、互いに大事無いことを確認すると、俺は事態の把握も兼ねて少女に尋ねてみた。素直な言い方ができないのは、俺にデフォルト備わっている属性だ。

「違うよ。わたしが来たのは 町の……」

俺の問いかけに具体的な家の場所を説明し始めた彼女。

激しく脱力する…… まさか皮肉を素で返されるとはね……

「そうじゃない！ どうして上から降ってきたのかを聞いてるんだ」

「ああ、そっちか。それはね、あそこから飛んだから」

そう言つて少女は頭上のマンションの四階にある通路を指差した。それは結構高くて、この程度の怪我で済んでいるのが不思議なくらいだった。

「飛んだつて…… まさかキミは背中に羽根があつて空を飛べちゃつたりするのか？」

「んむうゝ、そんなわけないじゃん」

「んじゃ、自殺でもしようとしてたつてののか？」

「うん、そう」

は？ いや、「冗談のつもりで言つたんだが…… マジ？

「でも、失敗しちゃった。てへへ……」

普通は運が良かった、というべきなのだろうが、生憎と自殺志願者の心境など理解できようはずもない。

だから俺は、呆れ半分のまま、適当に相槌を打っておくことにした。正直これ以上、こんな変なヤツに関わっていたくない。

「今度からは、下を確認してから飛ぶんだな」

「うん。そうするよ」

少女は屈託なく笑って見せた。

その笑顔は、自ら命を絶とうとするバカな輩とは程遠い、安らぎに満ちたものだった。

だからこそ、自ら命を絶とうとするバカな輩には到底見えない、可愛い少女だと言えた。

そんな少女が、なぜ自殺を望むのか、少しだけ興味が湧いた。興味の赴くままに、尋ねてみる。

「で、なんで死のうなんて考えたんだ？」

「……」

少女はちよつとだけ躊躇いを見せてくるり背中を向け、空を見上げながら言った。

「アレに、なりたかったから……」

「アレ？」

「うん、“空”」

「へえ、“落ちれば”空になれるのか…… そいつは初めて聞く宗教だな」

俺は胸のポケットから煙草をつまみ出して、火を点けた。

この煙のように、普通ならば“昇る”という発想の方が、空には近づけるような気がする。

だが返ってきた答えは、その予想を越えていた。

「そうすれば、“飛べる” ようになるはずだから……」
ますます聞いたことのない哲学である。

一度転落を経験すれば、人間飛べるようになるとも言っのたる

うか、こいつは。それなら、蠟ろうの翼で太陽に近づいた男は、きっと空になっ
ていていることだろう。

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「そうか……」

俺はやっぱり、適当に相槌を打って煙を吐き出した。

第一幕（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだ序盤も序盤ですが、応援いただけると嬉しいです。

第二幕

「お兄さんは、止めないんだね……」

少女が、少し困惑したような表情を見せ、そう呟いた。

本当は止めて欲しかったのだろうか。しかし、俺は興味の無いことには行動しない主義だ。

知り合いならいざ知らず、いきなり降って来た見ず知らずの少女の身を案じることなど有り得ない。その場限りの事態に労力を裂く気など、さらさらないのだ。

「別に。好きにしたら良いだろ。俺には関係ない」

「ふーん……」

そう言つと少女は、ひょこつと腰を曲げて、俺の顔を見上げるように覗き込んできた。

「普通は止めると思うんだけどなあ」

関心を持たれてしまったのだろうか。興味津々といった瞳で俺を見ている。

その上目遣いの表情に、少しだけドキリとする。

「悪かったな、普通じゃなくて」

恥ずかしさを隠すように、俺は毒と同時に思いつきり少女の顔に煙を吐いてやった。

少女が、わぶつ、と言つて顔を背ける。もちろん、これが俺の狙いだ。

「もう、煙を吐き掛けるなんて無礼だよ！」

「上から押し掛かってくるのは無礼じゃないのか？」

「んむう……」

すると少女は頬を膨らませ、抗議の姿勢を取るが、しかしすぐに微笑む。

「そつだね。それじゃあお詫^わびに、ウチにご招待してあげる」

「招待されると、どんな特典が付いてくるんだ？」

「夕飯、つてのどう？」

悪くない。来たばかりの町で、どうせ行く当てもなかったし、何より食事にありつけるのはありがたい話だ。

俺は招待を受けることにした。

「乗った！」

「受けた！」

少女は楽しそうに親指をぐつと立てると、自慢気じまんげにふんぞり返る。逸らしすぎで体勢を崩し、転びそうにならなければもう少し締しまっただろう。

慌てて腕を振り、体勢を立て直すと、少女は少しだけ頬ほを赤らめて言った。

「わたし、風原かざはら 蒼香あか」

「……俺は、天城あまぎ 空そらだ」

「空…… お兄ちゃん……」

「？」

急に驚きに目を見開いた少女 蒼香は小さな声で呟いて、しかしすぐにまた、嬉しそうな笑顔に戻る。本当に自殺を望んでいるとは思えないような笑顔。

その笑顔を見て、俺は不覚にも再び、胸の動悸ドキを感じてしまった。慌てて煙草の煙を、深呼吸のように思いっきり吐き出す。

煙と共に、胸の動悸も消え去った。

「それじゃあ、家に案内するよ」

そう言うのと蒼香は、くるりと振り返り、二、三步前へと踏み出す。俺はそれに倣ならって歩を進めようとして、ふと思い出した。

「あ、バイクがあるんだ」

「なーんだ。じゃあそれに乗って行こうよ」

「ガソリン、切れてるけどな……」

「……」

結局、ただの荷物と化した二輪車を引き摺って、町を歩くハメになったことは、言うまでもない。

第二幕（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだ序盤ですが、これからもよろしく願いします。

第三幕

ただの荷物でしかない、走行能力を失った二輪車を引き摺りながら歩く。

この町は土地が余っているのか、幸い、道は随分と広がった。都会ならば二車線は当然、場所によってはムリヤリ三車線にされていそうなくらいの、余裕たっぷりの車道。

歩道も大きな街路樹が植えられているにも関わらず、なお四、五人は横に並んで歩けそうなほど大きい。

おかげで車はおるか、すれ違う人にも気を遣わなくて済んでいた。

歩くこと数分、のんびりと歩いていた蒼香^{あか}が、道の真ん中にも関わらず急に立ち止まって、思い出したようにぽんと手を叩く。

「あ、そうだ。お買い物しなくちゃ」

「買い物？」

「うん。冷蔵庫の中、あんまり残ってなかったと思うから」

そう言ってくるりと回ると、蒼香^{あか}は楽しそうに微笑んだ。

「そんなに気を遣わなくていいぞ」

と、それに口先だけで応えてみる。本音と建前は別にしても、俺にだって、このくらいの“社交辞令”を言う心得はある。

が、それよりも何よりも、俺には早く辿り着きたい理由があった。しかし蒼香は、「でも」と言つて、やっぱり笑う。

「せっかくお兄ちゃんが来てくれるんだし、やっぱり商店街に寄って行こうよ」

“お兄ちゃん”というのは、俺につけられた“あだ名”なんだろうか。

なんだか無性にこそばゆくて仕方がないが…… まあ、気にしないでおう。

「いいけど…… その商店街は、ここからどれくらいなんだ？」

尋ねてみる。

「歩いて三十分くらいかな？」

「さ、さんじゅ……？」

その答えを聞いて、俺は愕然^{がくぜん}となった。

この町のことは全くわからないため、俺は蒼香について行くしかないが、その蒼香はというと、あつちでキヨロキヨロ、こつちでキヨロキヨロして、何ともゆっくりとした足取りである。

亀の歩みと等しい。

「なら、少し急がないか？」

俺はここぞとばかりに促した。

何しろ俺は今、バイクを押して歩いているのだ。こんなペースで歩かれたのではたまったもんじゃない。

自慢じゃないが、このバイクはデカイ。ゆえに重い。

本来、押していくべきものじゃないコレに、蒼香は自転車と変わらないような感覚を持っているのかもしれないが、はつきり言って辛いのだ。

早々に何とかしたかった。

「もうじき、日も暮れるしな」

「うゝん、そうだね。じゃあ少し急ごつか」

蒼香はそう言つと、大げさなほどに大股で歩き始めた。それにつられて、腕の振りも大きくなる。

それが運動会で行進でもしているかのようで、どこか可愛らしい。

「はあ……」

だが俺には、それに微笑みかけるほどの余裕はなかった。これみよがしに溜め息を吐いて見せる。

が、蒼香は全く揺るがない。

蒼香に聞こえないように毒づいて、重い鉄塊を引き回す。

「くそっ……」

また、溜め息が漏れた。

第四幕（前書き）

このお話を読む前に、補足説明をご覧ください。

第四幕

入り口に掲げられたアーチ　それを彩るは、

『ようこそ、中央通り商店街へ』

という、なんと“つまらない”、“ひねりない”、“珍しくない”、三拍子揃った名文句。

こういう場合、あたり障りのないものを選ぶのが、日本人という人種なんだろう。

脇に描かれているのは、コアラだろうか。にしては、少しばかり腕が長い。

耳の部分は欠けてしまったのか、その姿はナマケモノみたいにも見える。

商店街のアーチにコアラというのも脈絡がわからないが、ナマケモノではもつとイメージが悪かろうに。

早々に修繕することをお勧めしたい。

我ながら、いちいちケチをつけつつ、アーチを潜る。

商店街は、小さな町に反して以外に大きかった。造りもなかなか凝っている。

中世のガス灯が何かを象っているのか、小洒落た、色合い暖かな街灯が等間隔に並び立つ。

広いレンガ敷きの道路の両脇には、精肉店、鮮魚店、八百屋、惣菜屋、スーパー、ドラッグストア、ケーキ屋、和菓子屋、本屋、CD屋、喫茶店にファミレスにファーストフードと、一通りの店が軒を連ねている。

ここに来れば揃わないのは“大人のおもちゃ”くらいのものだろう。それにしあって、路地の奥の方にも行けば、見つけられそうな気がする。

「まずは、ここでお買い物」

と、楽しみにスーパーを指差す蒼香^{あか}。

『まずは』という台詞がとても気になったが、兎にも角にも俺は腕を休めたかった。

「俺はここで待ってるから、適当に済ませてきてくれ」

スーパーの駐輪場にバイクを止めて、煙草に火を点ける。最後の一本、とっておきだ。

「え〜？ 一緒に行こうよ」

蒼香は大いに不満そうに頬^{ほお}を膨らませる。

だが、俺はそれに取り合わない。

「俺が行っても仕方ないだろ。それに、楽しみは取っておきたいしな。材料を見たら、今日のメニューがわかつちまう」

「むう」

膨らんだ頬に口も尖らせて抗議してくるが、適当に腕を振って促すと 相変わらず不満そうではあったが 、蒼香はスーパーの奥に入ってしまった。

「さて、」

それを見届けると、俺は腕の凝り^こを解すため、ぐっと大きく伸びをした。

吐き出した煙が、風に乗って飛んでいく。

冷たさを増した北風が、クソ重いバイクを押してきた今の火照った体には心地良かった と思っただのも束の間、すぐに体が冷える。動いて体を温めなくなった。

「煙草でも買いに行くか……」

そこら辺を探せば、自販機くらいあるだろう。温かいコーヒーも欲しいな。

眼前に真っ直ぐ伸びる道を眺めてみる。自販機らしいものは見受けられない。

「仕方ないな」

俺は適当にあたりを付けて、路地裏の通りへと入ることにした。

問題は、どっちへ行くかだな……

【選択】

左の道へ

第五幕、Aパートへ

右の道へ

第五幕、Bパートへ

第五幕 Aパート（前書き）

第五幕 Aパート

左の道へ入ってみた。

「煙草、煙草……」

しばらく歩いてみたが、相変わらず自販機は見つからない。
ふと戻るだろうか、と心配になるが、それほど複雑な道ではな
かったため、すぐに帰ることはできそうだ。

横手に見えた角を曲る。

するとそこには、小さな古い楽器屋が建っていた。

商店街の道の造りに合わせたのか、こちらも赤いレンガが入り口
を為している。

店の名前は『a c a p r i c c i o』ア・カプリッチオ イタリア語で『自由

に』という意味の音楽用語である。

「入ってみるか……」

気の向くままに、ドアの取っ手を握ってぐっと押す。

ガラス張りのドア、その上に据えられた呼び鈴が、カラカラと鳴
った。

中は、外面よりもずっと小奇麗だった。板張りの床と黒い檜かしの柱
が、歴史を窺わせる。

流行のエレキから、クラシックのギター。トランペットやフルー
ト、サククスや筆ひちりきといった管楽器。マリンバやティンパニのよう
な打楽器まで、様々な楽器が狭い店内に整然と並べられている。

そしてその奥、ガラスケースの中に、まるで絵画が彫刻を飾るか
のように、美しく艶やかな光を放つバイオリンが立てかけてあった。
「……」

思わず、息を呑む。それほどに、このバイオリンは妖艶な輝きを
持っていた。

「気に入ったかね？」

「うをつ！」

と、耳のすぐ傍で、しゃがれた声が響いた。

この店の主人だろうか。驚いて飛び退くと、一人の老人が立っていた。

「随分と見入っていたようじゃが」

老人は、深く刻まれた皺に沿ってニヤリと笑む。

白髪混じり……もとい、量の少ない白髪そのものの頭に赤い野球帽を被り、赤い半纏はんてんに黒いモンペのようなズボンを履いて、おまけに年代物のパイプまで咥えている。

いかにも胡散臭い。

この爺さん、ひよつとするとこの店よりも古いんじゃないか？

俺は激しく動悸動悸のする胸を押さえて（怒りを鎮める意味も込めて）、二、三回深く息をつく。それでやっと呼吸が整った。

「いきなり耳元で話しかけるんじゃない……」

「いや、すまんすまん。久しぶりの客じゃったから、ついからかってやりたくなった」

そんなことをしてるから、客足が遠のくんじゃないのか……？

「ところでお前さん、見ない顔じゃのう」

「今さつき、この町に来たところだからな」

「旅行か何かかの？」

「そんなところだ……」

ジジイ（こんなヤツ、ジジイで十分だ）は、パイプでぶかぶかと煙の輪っかを作りながら、「よくまあ、こんな何もないところに……」などとブツクサ呟き、宙を仰ぐ。

その視線が俺から外れたのを見て、俺はこっそりと店を出て行くところだ！

こうとして、再び耳元で声を掛けられた。しかも今度は、大声で。唾液のおまけも付いた。

「だから耳元で話しかけるなと言ってるだろ！」

「随分と見入っていたようじゃが、このバイオリンが気に入ったのか？」

さっきも同じことを言っていたぞ……

そう言っでやると、ジジイは、

「じゃが、その答えは聞いておらん」

と、そっけなく答え（やがっ）た。

ボケてるわけじゃあないらしいな。面倒だが、正直に吐かないと帰れなさそうだ。

「見入ってはいたが…… 気に入ったかどうかは別だな」

「そうか……」

するとジジイは、急にしおらしくなって、独り言のように呟き出した。

「これは、ワシが若い頃に作ったものでな。今もこうして飾っているのだが、お前さんのように、足を止めてまで見てくれる者はなくてのお…… 最近は皆、やかましい音を出す物ばかりを欲しがるわい」

そう言うつと、急にまたニヤリと笑い、「時代なのかの」と続けた。俺も電氣的な音でガリガリと鳴らす音楽はあまり好きではなかったが、このジジイはそれも楽器、音楽の一つだと、否定はしていないようだ（無論、俺もそうだが）。

心底、音楽が好きなのだろう。少しだけ、親近感が沸いた。

「お前さんも、音楽をやるのか？」

ジジイがパイプをふかしながら、尋ねてくる。

そういえば、煙草の煙は楽器に良くないと思うんだが…… まあ、

空調がしっかりしているのだろう、ということに納得する。

「ああ。バイオリンを少しな」

「ほう、お前さんもバイオリンか。奇遇じゃの」

ジジイが嬉しそうに笑う。久しぶりの仲間を見つけた、ということか。

いつの間にか、先ほどの偏屈^{へんくつ}さも消えていた。

「ちゃんと手入れはしておるか？」

「まあ、多少は、な。旅の身では限界があるが……」

「ならば今度、持ってきたさい。特別に、格安で請け負ってやろう」
前言撤回。

「手入れくらい、タダでやってくれ」

「バカこくでねーわい。こっちもコレで飯を食つとるんじゃ」

「やっぱり偏屈ジジイだ、こいつは。」

「気が向いたらな……」

俺は、溜め息を吐きつつ出口へ向かいつつ、上着のポケットをまさぐった。そこに煙草の箱はなかった。思わず、ちっ、と舌を鳴らす。

すると、それを聞き取ったのか、

「煙草なら、正面の角を曲って少し行つた所に売つとるぞ」

と、ジジイが後ろから声を掛けてくれた。

耳元で囁かれなくて良かった。

俺は出口の扉を開けると……

【選択】

後ろ手を上げて、そのまま店を後にした。

まあ、一応は礼をしておくか……

ルート#1へ

第六幕へ

星野 輝琉

第五幕 Aパート（後書き）

いかがだったでしょうか？

このように時々、分岐して話が進んでいきます。混乱してしまうかもしれません、どうぞお許しください。

ちなみに、次回の分岐”???”は……

お楽しみに

第五幕 Bパート

右の道を曲つてみる。

随分と細い道だった。

ここにも店が連なっているのかと思いきや、並ぶは店の裏口の扉かゴミ箱、またはダンボール。

ふと、その中身が気になったが、仔猫でも出てきたら面倒なので、見ないことにする。

ふむ、これは“路地”というやつだな、^{パーフェクト}完全に。驚くほどに何もない。

それでも、せつかくここまで来たのだ。引き返すのも馬鹿らしいので、ひたすら先に進んでみることにした。

路地を抜ける ああ、何もない。

道が広くなった ふう、何もない。

視界が開けてくる ちっ、何もない。

ついに建物がなくなった くそ、やっぱり何もない。

「何だか、どんどん違つところへ向かっているような……」

行けども行けども、自動販売機は見つからない どころか、商店街の喧騒けんそうもあつという間になくなり、人気のない、街路樹の立ち並ぶ無駄に広い道が続くばかりになってしまった。

「煙草どころか、飲み物の自販機もないなんて、どんな田舎なんだよ、ここは……」

冷たい空気に溶ける白い息を見送って、少しだけ視線を上げてみる。

都会には有り得ない、開けた頭上。

ここら一帯は開拓中なのか、はたまた単に空地なのか、視界を遮るビルはおろか、建物自体ほとんどなく、遠くまでも見渡せる。

こんなところに道を作る理由があったのかと、疑問が湧くほどだが、その疑問は次第に大きくなる建物によって、解消される。

「病院、か」

白い壁に、ワンポイントの飾りのように赤い十字が引かれている。ぽつんと寂しげに一人取り残された、広場のゆきだるまのようなようだ。それが寂しい風景に拍車をかけている。

そりゃまあ、排気ガスが入り込んでくるような病室よりはずっといいだろうが……

「あ、そうだ。病院の中なら、自販機くらいあるんじゃないか？」
さすがに煙草はないだろうが、コーヒーくらいは買えるだろう。

ふと思い立った名案は、しかし足を病院に向けた途端に翳^{かげ}りを見せる。

「コーヒー買うただけに、病院って入っていいもんか……？」

それに、俺は病院というところが嫌いだった。

あの薬臭い匂い。雑多な人間。想像するだけで嫌気が刺す。

「やめた」

煙草もコーヒーも諦めて、結局戻ることにする。

持ち上げかけた右足をそのままに、くるりと回れ右。来た道を辿っていく。

ほぼ一本道だったから、迷うことはないだろう。

ほぼ一本道だったから、どのくらい歩いていたか、時間の感覚が失われてしまっていることが問題だが。

びゅう、と鳴きながら、北風が正面から吹きつけてくる。周囲に建物がないせいか、風は強い。

襟元^{えりもと}を両手で押さえて、俺はもと来た道に戻っていった。

病室の窓から、少女が虚ろな瞳を向けていた。

【第六幕へ】

第五幕 Bパート（後書き）

いかがだったでしょうか？

このように時々、分岐選択をしてお話を進めていくようにしていきます。

基本的には一本道なので、あまり気にせず楽しんでいただければ、と思います。

星野 輝琉ルート#1（前書き）

予想通りとは思いますが、これは別ヒロインのルートになります。
ヒロインの名前は…… それは後ほど。

星野 輝琉ルート #1

俺は扉を開けたものの、一応、礼はしておくべきだろうと思い、振り返った。

その時、

「あら、お客さん？」

奥の方から声が聞こえてきた。

それを追うように、少女がふわりとした優雅な足取りで姿を現す。

瞬間、薄暗い店内に、その少女の立つ場所だけが柔らかな光に包まれたような錯覚に陥った。

どこまでも透き通る白い肌。

風が吹けば飛んでいってしまうのではと思うくらいの、華奢な体つき。

そして何よりも、その小さな顔の内にある瞳はどこまでも澄み渡っていて、見つめていたら吸い込まれていってしまいそうだ。

「いらつしゃい」

少女がにこりと微笑む。

「あ、ああ……」

少女が全く邪気のない微笑をするもんだから、見つめていた自分に非があるような気がしてきて（いや、実際他人を凝視するのはあまりよくないことだが）、何だか急にばつが悪くなってしまった。

俺は思わず、視線を下に逸らす。

彼女の細い脚を、これまた細い黒のジーンズが覆っている。

上着は、その手の男なら感涙物の大きめのワイシャツ。 の、

上に深緑色のエプロンを身に付け、頭に赤いバンダナ、軍手をはめた手には何故か金鑰かなやすりを持っていた。

しかもよく見れば、全身埃ほこりに塗まみれているのか、粉っぽくなっている。

ああ、“柔らかな光”と思ったのは、舞い上がった埃に日の光が当たって、それで白く見えていたんだな……

少女は二、三步、俺の方に歩み寄ると、頭に巻いていたバンダナを取る。

はらりと解ける艶やかで長い黒髪は、彼女の肢体をよりはつきりとさせるようで、とてもよく似合っている。

その黒髪を自慢するように、少女は軽く頭を振った。

同時に舞う、大量のほこ　げほっ　り……埃。

「あ、ごめ　けほ、けほっ……　あはは、ごめんごめん」

今度は微笑ではなく、可笑しそうに笑う少女。

これはもう、営業向きの笑い方じゃないな。初対面、しかも客と店員という関係だというのに、随分フランクな対応だ。

埃を撒き散らしておいてそれかよ……　ってな気分にもなる。

俺はいかにも迷惑そうな顔をして片手で口を押さえつつ、もう一方で顔の前をパタパタと扇ぐ。

こんなことで埃がいなくなってくれるはずはないのだが、ま、精神衛生上の問題だろう。

そういえばどうして、無駄だとわかっているのにやってしまうんだろうな、コレ。

パタパタを続けつつ、一応は文句を言うておく。

「一応、客なんだけどな、俺……」

「だからごめんってば……　奥で作業してたもんだから……　本当にごめんなさい」

「ま、いいけどな」

他人から受ける無礼も、相手によって随分と心境が変わってくるもんだ。

あのジジイだったら今頃、問答無用で張り倒してるな、きっと。あのジジイは「商品を汚すな」といつも……」と、愚痴ぐちぐち々と呟い

ている。

それに少女は「ごめんごめん、おじいちゃん」と、反省の色薄く応えている。ジジイは喚く^{わめ}と埃を吸って咳き込んでしまうので、大きな声を出せないのだろう。いかにも“仕方ない”といった顔で、口を塞いでいる。

まあ、それはありがたいんだが……　つかジジイ、商品よりも客を心配すべきだろ、客を。

「そんなことより、入って入って」

少女は遊びに来た友達を出迎えるように、軽く促す。

このノリはもう、俺が“客”だという認識がないんじゃないだろうか。あるいはジジイ共々、客商売のイロハを全く知らないかのどちらかだろう。

っていうか、俺、帰るところだったんですけど……？

【星野　輝琉ルート#2へ】

星野 輝琉ルート#1（後書き）

いかがでしたでしょうか？

すいません、まだヒロインの名前が明かされていませんね。

次回には必ず……

星野 輝琉ルート#2（前書き）

遅くなりました。大変申し訳ありません。

楽しんでいただければ幸いです……

これは『星野 輝琉ルート#1』の続きとなります。そちらへ進んだ方は、第六幕を読む前にこちらをお読み下さい。

星野 輝琉ルート#2

「さて、それじゃあ」

と、少女の一声で唐突に自己紹介が始まる。

別に俺は、“店員さん”と“お客さん”で構わないのだが、何故だかこの場は、そういう流れになってしまっていた。

場の雰囲気というのは、かくも恐ろしいものなのか……

「俺は、天城あまぎ 空そらだ」

よろしくな、と言いかけてやめる。

俺は旅の身。別によろしくしてもらう必要がない。

人懐っこい彼女のことだ。そうしてしまえば“赤の他人”から“知り合い”さえも通り越して、あっという間に“友達”にまで昇華されてしまうだろう。

必要以上の人付き合い、人間関係を築くのはを好ましくない

のだが…… どうやら、そもいなくなってしまうたみた
いだな。

「私の名前は輝琉 星野ほしの 輝琉ひかりよ」

「よ」のところで、輝琉と名乗った少女はパチリと片目を閉じた。
ウインクというやつだ。

どうにも、俺は気に入られてしまったらしい。

年上だろうか。その仕草も、整った顔立ちも、可愛いというよりは凛々しく見えた。

ジジイと違って印象が良い。

「ワシの名前は星野 稜りょうげん眩くらよ」

「やめろジジイ、気色悪い！」

ジジイが少女と同じ仕草をする。

彫りの深い皺しわだらけの顔でウインク…… しかも微妙に裏声を出しているからますます気持ちが悪い。

「なんじゃ、洒落のわからん奴め……」

そう言つてジジイが頬を膨らませる。

ぷっくりと膨れたそれは、メロンパンのようで……　　って、ダメだ。どう取り繕^{つくろ}つても気持ち悪い！

頼むから本当にやめて欲しい。吐き気がする……

祈りが通じたのか、ジジイは渋々といった感じで、元通りの偏屈^{へんくつ}な顔に戻る。

「もう、おじいちゃん、お客さんをからかわないの」

輝琉が諭すように言った。

ん、待て。

そういえばさっきは何となく聞き流してしまったが、今「おじいちゃん」って聞こえなかったか？

「おじいちゃんがそんなだから、お客が減っちゃうのよ」

やっぱ「おじいちゃん」って言った……

ってことは、まさか……

「二人は、家族？」

恐る恐る、尋ねてみた。すると輝琉は平然と、

「ええ、そうよ」

ずさっ！

思わず後ずさる。

そうして二人を同時に視界に収め、見比べた。

……悪いがはつきり言つて、これっぽっちも似てない。まったくちつとも全然サッパリ似ていない。

『月とスッポン』なんて喻えさえも、侮辱の気がする。

もちろん、スッポンに。

「あゝ、ジョーク？」

確認というよりはお願いのように。

だが、二人は全くの同じ仕草で互いを指し合い、

「私のおじいちゃん」

「ワシの孫」

何故だろう、急に眩暈めまいがしてきたぞ……

だが何故だろう、妙に納得もできてしまう……

外見が全く似ていないから、サギだと叫びたくなるが、よくよく考えてみると、中身は通じるところがある。

人懐つこいというか、敷居が低いというか。

傍若無人ほうじやくびじんというか、天真爛漫てんしんらんまんというか。

いや、最後の表現はジジイには使いたくないものだな……

何というか、そういった“心の壁”みたいなものをあまり感じさせない、親近感のようなものを二人とも持っている。

「で、空は何しに來たの？」

あ、ほら。いきなり呼び捨てるこんなところが。

輝琉はしれつとした顔で話し掛けてくる。

もう完璧パーフェクトに“友達付き合い”の感覚だよ、コレは。まだ知り合つて十分も経つてないというのに、呼び捨て。

これを“無礼”をとられれば、「別に何しに來てたって、こっちの勝手だろ！」と文句を言いたくなる奴も出てくるだろう。客足も遠のくはずだ。

とはいえ、俺にとってはむしろ、ありがたいものだった。

妙に敬語を使われるよりずっと気が楽だ。向こうがそのつもりなら、こっちも敬語を使ってやる必要はないし、それで文句を言われることもなからう。

「帰るところだ」

というわけで、何を憚ることもなく、はっきりと答えてやる、俺。いや、実際帰ろうとしたところだし？

「へ？ 楽器、見に來たとかじゃないの？」

言いつつ、輝琉はジジイの方を見て、視線だけで問い掛ける。

そうしてジジイは、

「ああ。こやつはな…… ワシに逢いにきてくれたんじゃ！」

「たまたま通りかかったんで、店内を覗かせてもらっただけだ。俺

もう少しばかり音楽をかじってるんでな」

「見え透いたウソをつくんじゃない、ジジイ……」とか言ってるうと思っただが、なんだかもう、いちいちツツコミを入れてたら負けのような気がするので、冷静　もうジジイの発言を無視するくらい　に返答する。

ありがたいことに輝琉も、「あ、そうなんだ」と言っただけ、ジジイではなく俺の言葉に応じてくれた。

「何の楽器をやってるの、空は？」

「バイオリンだ」

「へえ、そうなんだ！　調子はどう？」

少し前にも、同じようなことを聞かれたな……

さてしかし、この問いかけはどちらだろう。

少し思案して、どちらとも取れる答えを返す。

「ぼちぼちだな。最近はあまりしていないから、どうなっているか」

「そつか。じゃあ今度ウチに持ってきて。手入れしてあげる」

やっぱりバイオリン本体の方だったか。まあ楽器屋なんだから当然だろうが、俺の“腕”について訊かれていたような気もする。

どちらにしたって、大した腕じゃないし、答えは同じなんだが。

まあ、せつかく手入れをしてくれると言っただ。次に来るときには頼むのもいいかもしれない。

なんてことを考えていたら、輝琉は、

「格安で！」

ああもう、お前らは血縁者だよ、本当。

少し前の会話をまんまなぞりやがって……

俺は思いつき溜め息を吐いて、くるりと踵きびすを返した。

「気が向いたらな……」

やっぱり少し前の会話をなぞって、俺は出口の扉を開け、後ろ手を上げてそのまま店を後にした。

【第六幕へ】

星野 輝琉ルート#2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ようやく名を明かせました本作品もう一人のヒロイン、“星野輝琉”。

作中にあるように、天真爛漫に描ければいいのですが…… 何はともあれ、頑張ります。

第六幕

途中で見つけた小さなタバコ屋で煙草たばこを買い足し、もと来た道を辿たどってスーパールの前へ戻る。

「急いそぐうって言ったの、お兄ちゃんなのに……」

やつのことで戻ってくると、そこには不満そうな顔をした蒼香あかが、いっぱいの袋を両手にぶら下げて立っていた。

そういえば、店に入る時も不満そうだったな。

「悪かった。自販機を探してたら、道に迷っちまったんだよ」

「……」

適当に誤魔化ごまかそうとしたが、それが返ってまずかったのだろう。

蒼香は相当いじけてしまったらしく、帰る道すがら、何とかご機嫌を取ろうとして、またかなりの時間を要することになった。

その間、また亀の歩みになっていたことは、言うまでもない。

駅前の賑やかさからも、商店街の活気からも遠く離れた、閑静な住宅街。

アスファルトの道路脇に立ち並ぶは、アスファルトの塀へいと無機質な電信柱。

空を覆うは、黒や鼠色ねずみいろ、茶色といった暗色の屋根と風情の欠片もない電線。

どこを見ても人工物だらけの味気ない世界ではあるが、それでも時折、塀の向こうに見える庭の緑と木造の門のおかげで、辛うじてここがまだ生物の存在し得るところであることがわかる。

その道路の真ん中を、俺と蒼香は二人して歩いていた。

まだ出逢って幾程も経ってはいないというのに、それがさも当然であるかのように、二人並んで。

しかもムダに距離が近い。

「もう少しで着くからね」

蒼香はそんなことを全く気にもしない様子で、もう四回目になる言葉を口にする。

「さつきから『もう少し』と言ってるが…… いつになったらお前の家に着くんだ？」

「うん、もう少しだよ」

はい、五回目。あと何回この台詞を聞くことになるのだろう。

正直、もう耳が痛い。頭も痛い。ついでに言うとな腕も痛い。

スーパで待たせてしまった、そのおわび（ご機嫌取り）として、俺は全五つの買い物袋のうち、その大半の四つの荷物を持つことになった。

両手に荷物を二つぶら下げて、バイクの両手にも二つ持ってもらっている。キャリアには、バイオリンが入っているので、こうするしかない。

どのみち、その全重量は俺の腕にかかるわけだから、そりや疲労もするというものだ。

「……いつになったら着くんだ？」

俺はそんなことをできるだけ気にしないように、もう五回目になる言葉を口にする。

「もう少し」

六回目の言葉は、やっぱり信憑性しんぴやうせいに欠けていた。

第六幕（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ノンビリですいませんが、気長にお付き合いくださると嬉しいで
す。

第七幕

「到^{いた}着^き！　ここが私のお家だよ」

蒼香^{あか}がバスガイドよろしく、左手を大きく横に突き出して、『右手をご覧下さい』ポーズを取る。

差し出された手の先には、いささか古風で、小さな日本家屋^{にほんかおく}が建っていた。

「や、やつと着いたのか……　疲れた……」

ようやく荷物を降ろせる。

もうあれから、何度『もう少し』と聞いたかshれない。というか、『いつになったら』、『もう少し』の会話しかしていないような気がする。

「ただいま」

蒼香が門扉^{もんび}を開けて中へ入っていく。

っていうかおい、荷物運ぶの手伝え！

俺に四つ全部を家の中まで運ばせる気か？

と、言ったところで立ち止まりそうにないので、仕方なくバイクを引いて蒼香についていく。

門を潜^くると、小さいながら庭付きの家であることがわかった。

庭先の縁側^{えんがわ}は誰の趣味だろう？

丸くなる猫^{タマ}を隣に、のんびりと茶でも啜^{すす}るのは気持ち良さそうだ。

秋も深まつてきた今の時期では、寒くて仕方ないだろうが。

整えられたこの庭にバイクを入れるのも無粋なので、少し狭いが玄関前にバイクを止めることにした。

蒼香がそれに合わせるように、玄関の扉を開く。

「ただいま」

「ああ、おかえり蒼香」

と、間髪^{かんはつ}入れずに返事をしたのは、なんと中年の男。

「今日は随分と遅かったね」

「ちょっと、ね。あはは……」

やりとりから察するに　蒼香の父親だろう。

「す、すぐご飯の用意するからね、お父さん」

ほらね……　ああ、なんとなく気まずい。

愛娘が男を連れて帰ってきた。

しかも、帰りはいつもより“随分と”遅いらしい。

この状況をあの“父親”という生物は、どう捉えるのだろうか。

「おや、そちらの方はどなたかな？」

そーら、来た……　さて、どうしたものか。

「あ、ええと……　この人は、“天城^{あまぎ}空^{そら}”さん。ちょっと迷惑をかけちゃって……」

と、俺の助け舟となったのは、隣に立つ蒼香だった。

そう切り出すと、彼女は俯きがちに言葉を紡ぐ。

「そのお詫びに、夕ご飯に招待したの。いい、よね？」

「“空”……！？　ふむ……」

蒼香の父親は、眼鏡の向こうの瞳を細めて、じっとこちらを見る。娘が連れてきた男に興味津津なのか、あるいは品定めでもしているのか。

年の頃は四十代と言ったところか。

線の細い、スラリとした体躯^{たいく}。ややこけた頬に髭^{ひげ}はなく、髪もさっぱりと短くまとめられて、清潔感が漂っている。

家の様式に揃えているのか、落ち着いた和装がよく似合っていた。多分、庭先の縁側はこの人の趣味だろう。

どうでもいいけど、あの眼鏡、高そうだな……

「うん、いいよ」

と、不意に眼鏡の奥の瞳が笑顔のそれに変わった。

とても優しい声で、彼は“俺たち”を迎える。

「おかえりなさい。そんなにたくさん荷物じゃあ、疲れただろう？　早く上がりなさい」

「うん。お父さん、ただいま」

蒼香が大きく頷いて、靴を脱ぐ。父親に許可されたのがそんなに嬉しかったのか、こちらまで笑顔満開だ。父親のものとはどこか質が違うように見えるが。

「あ…… えっ、と……」

蒼香が家に入っていくのを見送って、一人残された俺は抱えた荷物ものの重さも忘れ、困惑に目が泳ぐ。

やがて正面に立つ和装の男の瞳に泳ぎ着くと、

「おかえりなさい」

やはり、笑顔で父親は言う。

その大きいと思えてしまう優しさに、分ぶんも忘れて思わず、答えてしまった。

「ただいま」

父の笑顔が、より深まっていた。

第七幕（後書き）

いかがだったでしょうか？

家に行くなんてそっくりですね、すいません。

どうぞご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312b/>

空に馳せる想い【長期休載中】

2011年1月8日02時49分発行